

【優秀賞】

話す相手はどこに

富田 紗英（東京都 白百合学園高等学校 2年生）

いつもは「まだかまだか」と待つばかりで退屈なバス停での時間。だが、この日は違った。

学校の研修旅行からの帰り、駅まで迎えに来てくれた母に、「やっぱり行って良かったなあ。厳島神社、すごいきれいだった。天気もよかったし。写真いっぱい撮ってきたよ。見て見て。」と、私は暑さにも疲れにも負けず思い出を次々に話す。母は、「ほんと、きれいなね。」

と、写真を眺めながら楽しそうに聞いてくれていた。しばらくしてバスが来て、乗り込むときに、

「いいわねえ、親子でこんなにお話ができて。あんまりに楽しそうなものだから、私まで嬉しくなっちゃったわ。」と、あるおばあちゃんが陽気に笑って言った。

見知らぬ人からの突然の言葉に驚いて、その場では笑って会釈することしかできなかった。

前方の座席に座って、家までの見馴れた景色に心の中でただいまと言いながら、おばあちゃんの言葉を思い出していた。いまままで自分がどれだけ家族と会話をしているかなど考えたことはなかった。

この日は研修旅行の帰りで私から話すことが山ほどあったが、普段はどちらかというと家族から話しかけられることが多い。

ふと、こんな出来事を思い出した。

中学二年生くらいの頃、家でヘッドホンを着けて音楽を聴いているときに、母に話しかけられて、私は

「邪魔しないでよ。」

と嫌がり、しばらく全く聞こえていないふりをしたことがあった。

それを今になって強く後悔した。自分のことばかりに夢中になり、周りとの関わりを断ってしまうのは悲しいことだ。

情報化社会となった現代では人対人の会話が減少している。外にいても、家の中でもスマートフォンを弄りっぱなしで、画面越し、SNS上での「友達」との関わりに依存し過ぎている人も多い。

しかし、人がコミュニケーションをとるとき、話の内容などの言語情報が及ぼす影響は一割程度で、口調や表情といった非言語情報がほとんどを占めているという研究結果を耳にしたことがある。言葉では伝わらないことのほうが多い。キーボードで打ち込まれた無機質な点と線では、本物の言葉の表情や色あいは出せない。

若者たちにインターネットやスマートフォンの利用についてよく注意がなされる一方で、親がスマートフォンに夢中で子供が放ったらかしになっているような光景も電車などで見かける。「構ってよ」と騒ぐ子供を、画面に視線を落とすままなだめる親。それを見るたびに胸がぎゅうっと痛む。

スマートフォンやSNSを使うなど言いたいのではない。これらが普及することによって私たちが得られた恩恵は計り知れない。

い。遠く離れた人とだって、いつでも簡単に連絡が取り合えるようになった。

そんな情報化社会に慣れきった私に、バス停で出会ったおばあちゃんは大切なことを教えてくれた。

おばあちゃんが「嬉しくなかったわ。」と言ってくれたお陰で、どうということもなかった母との会話が、温かく輝きをまとったもののように感じられた。

きっとおばあちゃんは、現代の人々が画面とにらめっこし続けている様子を寂しく思ってたに違いない。

インターネットの普及によって各個人のコミュニティが広がっている今だからこそ、身近にいる人との会話を大切にしたい。何気ない家族とのやり取りを大事にしたい。そう思うことが出来た。

深く考え込んでいると、気付けば母が降車ボタンを押していた。そう言えは思い出話はまだ途中だった。

降りるとき、後方にいたおばあちゃんに

「ありがとうございます。」

とお礼をしてから、

「それでね、二日目はね……。」

と、母に続きの話をした。